

[エクラ]

知性も経験も、輝きだすのは今。

éclat

11

November 2008

特別定価 830yen

<http://eclat.shueisha.co.jp>

BEAUTY

倉田真由美
細胞再生美容
最新NEWS 10

山本浩未
マイナス7歳
美肌づくり明暗テク

INTERIOR

本邦初公開!
カトリーヌ・メミの
「バリの家、
ノルマンディーの家」

ART

宗達、光琳、抱一
「琳派」ブランド
大研究!

総力特集

どの時代でも最先端。新しく、懐かしくて、ワクワクして

私たちの 銀座NOW

FASHION

今年のクラシックは
「ひとクセあり」が
キーワード

「美スタイルスカート」時代、到来!
首もと最旬アレンジ
この秋も「巻き」ます

極上通販
エクラプレミアム

1. 別冊付録
秋冬スタイル、小物、コスメ…
満載46点
2. 高橋みどりさんがオーダー
秋のリアルクローズ&小物

黒木 瞳

私を育ててくれた街・銀座

スペシャル対談
檀ふみ×阿川佐和子
銀座「今昔」物語

現代美術も古美術もこの街ならではの
銀座へアートを買いにいこう

特別付録
保存版別冊 52P

銀座
新・美味
手帳

本誌である「ギャラリー」は
3つのゾーンに分けて
サロン、ダイニングといった
ゾーンが展開されている。
手前はARCHITECTURE-Xという
シリーズのテーブルと
CHAISE longue の椅子

ブランドのエスプリが満ちる
開放的な「ギャラリー」

本邦初公開！
クリエイターのプライベート空間

撮影/山下雅夫 取材・文/鈴木春恵

ストイックなまでにミニマムでありつつ
このうえなく上質で贅沢なインテリア。
パリの洗練の現在形を世界に発信しつづけている
カトリーヌ・メミさん。ギャラリーや2軒の自宅には
クリエイターとしての顔はもちろん
ひとりの女性としての生き方が映し出されている。

カトリーヌ・メミさんの「パリの家」

カトリーヌ・メミ
インテリアデザイナー。広義エージェンシーにてインテリアスタイリストとして活躍したのも自身の名前を冠したインテリアブランドを創設。08年で15周年を迎える。



つぎることのない
クリエーションの源

ここは「ギャラリー」と名づけられた「カトリーヌ・メミ」の本居。パリ左岸はサンジェルマンデプレ地区、300㎡という広々としたこの空間には、彼女のクリエーションのエスプリが満ちている。93年のブランドの発足以来、純化したライン、遊びぬいた素材と色調によるデザインは、ネオ・ミニマリストと評され、時代の潮流を生み出してきた。パリ発の新しいリュクサスの形は、たちまち国際的名声を得て、現在では、東京、ニューヨーク、ロンドン、ブリュッセルのショールームをはじめ、モスクワ、ドバイ、アテネ、中国にも展開している。

「ビュアなデザインであるだけに、コピーされることもありました。でも、それだからかえって、常に新しいものを作らうという進化につながっているのかもしれないね。15周年目の今年のコレクションでは、今までにない思いきった素材の組み合わせを試みました。完成品を見ていたんだけど、今



(右) イタリア・トスカーナの伝統的作家クリスチヤヌ・ペロシヨンの作品。個人的にも愛用が深い彼女は、ブランドオリジナルの作品を依頼している。(右) キャンドルやルームコロンも独自の美意識によって制作されている。写真は「poivre」(コショウ)のシリーズ



(上) エントランスそばのコーナーの装飾。なにげないアライメントのあしらいだが、その向きにもカトリーヌさんのこだわりがある。(上左) NEW-YORK シリーズのソファが主役になったサロンのディスプレイ。(右) 引き出しの裏に手付箋で貼られている RIVE GAUCHE シリーズのコントロール ● CATHERINE MEMMI Galerie 11 rue Saint Sulpice 75006 ☎01-41 07 02 02 10-30-39-00 毎月・日曜



interview

Catherine Memmi



から楽しみだわ」

と、デザインスケッチを次々と見せてくれる様子からは、旺盛な創作意欲がうかがえる。ここまで大きくなったブランドだが、クリエーションの核は常に彼女。つぎることのない発想の源はいつたどこにあるのだろうか。

「仕事上、世界中の都市を行き来しますけれど、オフイスに閉じこもって打ち合わせするだけじゃなくて、街を歩いたり、テラスに座ったり、その土地の空気をちゃんと感じとるための自分の時間をもちことにしています。そして、パリに戻れば、最低1週間はいるようにします。そんなふうにして、いろんな場面で日々目にするあらゆる物やデザイン、本、旅の風景やホテルのしつらえ、街角のイメージが、私の潜在意識のなかにどんどん堆積していつ、何かの拍子に、まったく新しいデザインという形をとって現れる。そういうことなんじゃないかと思えます。そして、クリエーションするときにはいつも、「私が新しいアパルトマンをもつとして、これを買うだろうか」と、自問するんです。何が必要かということ、それは、マケットという観点からではなくて、むしろ、新しい美的追求というところから出発するものです。だから、ここには私が個人的に欲しくないものは存在しません」

確かに、カトリーヌさんと話かけているソファからギャラリーを見渡せば、実際の住まいのインテリアのように、クリエーションがすべて所を得た状態で配されている。そして、その美しく調えられた居心地のよい空間から腰を上げて、プライベートスペースへと案内していただくことにした。

「ノルマンディーの家」



っている。「私自身が欲しいと思わないものは、ここにはない」と、ギヤラリーでのインテリアビューで話してくれたとおり、彼女のプライベートスペースもまた、自身のクリエーションで構成されている。ギヤラリーと違うところといえば、いかにも1890年の建築という瀟洒なアバルトマンらしく、天井や壁に施された装飾やマンデルビーヌがエレガントな柔らかさを醸しだしている点。そして、「トータルルックではなく、ちよつとしたサプライズを添えたくて」と、ブランドのシリーズ以外の調度がアクセント的に配されている。総面積約200㎡、2つのサロン、ダイニング、キッチン、寝室とバスルームがそれぞれ3つ。そこにカトリクスさん夫妻と、3人の息子のうち、末っ子のティーンエイジャー、この3人が移らしている。それにしても、「本当はここで実際に生活しているのですか?」と思わず口に出そうになるほど、隔々まで完璧に調えられている。

「もちろん、撮影を意識して少しは気を遣っているけれど、ふだんもこれとはほとんど変わらない状態よ」

では、さぞかし人を招く機会も多いのかと思えば、そうではないという。

「招くのは、本当に親しい友人だけで、社交はあまりしないほう。ライフスタイルは、できるだけ真摯でありたいと思っています。孤独であることもときに必要だし、熟考する時間も大事。だから、インテリアも厳選して、本当に必要なものを置きたいの」

なるほど、ヨーロッパのZENスタイルの潮流を作ったカトリクスさんならではのスタイルが、プライベートな面でも貫かれている。

オスマニアンスタイルの パリのアパートマン ミニマリストのエレガンス



淡い光が射し込む モノトーンのリビング

アパルトマン本来の装飾を省かしつつ、自身のブランドで開発されたサロン、トータルブラックをあえてくすくす「サブライズ」としてファミリーに似る一人掛けソファをモノトーンの繊細なコットンサテンで張り直して、アクセントにしている。卓上には、ペロションさんの作品が置かれ、「アルカール・ミューラル」のブーナが取りを添えている(写真下)。



オブジェの色合いにも 統一感のあるインテリア

- 写真は、ダイニング、壁際のランプシェードには、サロンのソファと同じ色が使われ、アパルトマン全体の統一感がある。
- サロンの奥、やはりモノトーンの装飾は友人アーティスト、クララ・アルサールさんのエッセンツ。

厳選したものに囲まれて 自分らしく暮らす

ギャラリイを出て、改装を終えたアパルトマンへと向かった。ほんの5分ほどで、19世紀後半のオスマニアンスタイルの立派な建物が連なる、ラスバレイユ通りに行き着く。サンジェルマン地区でも、とりわけ裕福な通りのアパルトマンが集まっているその一角、大きな鉄門扉を入って、クラシカルなエレベーターで5階へ上がり、これまた立派な開きの木製扉の先がカトリクスさんの住まいだ。エントランスの奥に、柔らかな光あふれるサロンが広が

Paris appartement
Catherine Memmi

んにとつても慣れ親しんだイメージだ。
その格別の思いのある土地に、彼女
は常に家を購入している。最初は、少
内陸に入った場所にあるファームを改
装して、ついで、パリジャンたちの高
級避暑地として有名なトルービルとオ
ンフルールの中間に位置する家、とし
て、06年の冬からは、トルービルの町
にはど近い海岸線にたすむこの家。

「フランスの雑誌からも盛んにリクエ
ストがあつたけれど、この家をメデ
アで紹介するのはこれが初めてよ」

アングロ・ノルマンスタイルと呼ば
れるこの地方の伝統建築の持ち味を尊
重しつつ、内部の隅取りを大幅に変更
し、壁も床も天井の色も一新するとい
う大改装は、すでに1年余りたち、よ
うやく完成に近づいてきたところだ。

「この家は、ニューヨーカーの別荘地、
ハンプトンのイメージでいいこうと思っ
たの。ニューヨークとハンプトンは10
km、パリとトルービルは200km。その距
離感が似ているわ」

1階は、サロンとダイニングとキッ
チン、2階には、3つの寝室と書斎が
あり、さらに3階にも3寝室と、全部
で6つの寝室があるという間取りは、
息子たちとその家族や友人たちが一
緒に過ごすことを想定してのもの。さ
らに地下には、遊戯室とサウナが設けら
れている。部屋をめぐるながら、「プ
チホテルのように作りたいかった」とも
カトリニスさんは言った。つまり、各
部屋のリネン類をそろえることによ
って、家全体として統一感のあるインテ
リアになるようにと意識している。

テーマカラーは白とグレー。ただし、
グレーの色はひととおりではなくて、
1階はワイドグレー、2階はブルーグ

家族が集う家の大切な場所 ダイニングルーム

もともとは静寂を思わせるような
マホガニー色をしていたという壁全体を
すっきり一新したダイニングルーム。
家具はすべてが彼女のブランドのもの。
部屋はやはりベロシオンさんの作品で
この家のために特別にあつらえている。
白が基調の空間のアダセントのように
右の角に置かれたオブジェは
ナイジュリアアのプリミティブアートで
「ようこそ」の意味合いがあるのだとか。

機能性と美意識が 共存するキッチン

ダイニングの壁の上の
スライド式の扉を開ければ
アメリカンキッチンになる工夫が、
キッチンの引き出しや棚には
正方形のメタルを取っ手として使い
モダンな雰囲気を醸えている。
下の写真は、撮影の前にと
ご主人が用意してくれたコーヒー。
いかにこの家の雰囲気にふさわしい
プレゼンテーションだ。





Normandie maison

Catherine Momm

窓の外に広がる海の色が
インテリアにも感じられる
ノルマンディーの家

家族との時間を楽しむ

パリから2時間の「週末の家」

画家の家にカトリーヌさんは生まれた。祖父は自身のギャラリーをもつプロの画家であり、父親も本業に劣らない情熱を絵に注いだという。彼らがしばしば題材にしたのは、ファミリーのホームグラウンドであるノルマンディーの海景。ブルーからグレー、ときにシルバーへと微妙に変化する諧調は、パリ生まれ、パリ育ちであるカトリーヌさ





コーナーごとに配慮した グレーの色合い

左上は1階のサロン。右ページの写真がその右側に広がるコーナーでソフトな光がライトグレーの壁に映える。右上は、クラシカルな洗面台が美しい1階客室のバスルーム。右は、息子夫妻のための寝室に隣接したバスルームで、バスタブもグレー。左は3階のゲストルーム。シャープでモダンな天蓋つきベッドもやはりカトリクスさんのデザイン。



レシ、3階は濃いグレーと微妙に変えてある。

この「週末の家」でのファミリーは、みんなよく眠れるせいも、ちよつとはかりお寝坊になるという。

ゆつくりと朝食をとったのちに、隣町ドールまで時間をかけて浜辺を歩き、芝生の庭のテーブルでランチ。そのあとは読書というのがカトリクスさんのここでの過ごし方だ。夏ならば、英仏両語を一望する美しい砂浜のデッキチェアが、冬にはサロンの大きな暖炉の前が、読書スペースになる。

「インテリアコーディネイトでも、ハーモニを第一に考えるけれど、生き方そのものも調和的でありたいと思ってきました。旅したり、自然のなかを歩くことも私にとっては欠かせないし、家族がそばにいることも大事。そして、ときにひとりつきりの時間があり、友人との時間があり……」

子供が小さかったときには、確かに時間のやりくりが簡単ではなくて、もう少し彼らと一緒にいるようにすればよかったのかなと思うけれども、そう感じる母親はむしろではないでしょ

伝統的な建築ならではの ディテールを生かして

19世紀終わりに建てられたというこの家のチャームポイントともいえるディテール。1階客室の窓には、「牛の顔」と呼ばれる小窓がありダイニングでは、窓の下や柱に木彫りが施されている。階段の手すりの端もまたユニーク。



う。だから今は、孫との時間を楽しむようにしているのよ」

そう。カトリクスさんは若いおばあちゃん。2階の1室にはベビーベッドが置かれ、庭にはクマの模様があるデッキチェアが控えていて、スタイリッシュな家のささやかなサプライズになっている。

このようなインテリアに囲まれて育つと、いったいどんなセンスの持ち主に成長するのだろうかという、こちらの問いに、カトリクスさんは、静かに微笑みながら、言葉をつづけた。

「美しく住まうということとは、日常の煩雑なことだけに終始するのではなく、人生をすこし距離をもって眺めることにつながるのではないかと思います。贈贈するだけでも言えるかしら」

祖父や父のように絵を繙くこと、あるいは、同じくノルマンディーを愛した大好きな作家、フランソワーズ・サガンやマルグリット・デュラスのように物語を書く目がいっつかくるかもしれないと彼女はいう。それは絵を書く、クリエーターという彼女の表現手段の選定として、自然の流れなのだろうと思えた。

Normandie maison

